

「消化器内視鏡用語集」

日本消化器内視鏡学会用語委員会 編集

大阪医科大学教授

大 柴 三 郎

日本消化器内視鏡学会の学会誌 (Gastroenterological Endoscopy) は、1989 年現在 31 巻の歴史を迎えている。この間、会員数は年々著増の一途を辿り、日本における各学会中第 4 位 (約 17,000 名) を占め、投稿論文数も毎月 30 編を数えている。しかし、内視鏡学は日本がリーダーシップをもつ分野でありながら、外国人医師に論文が読まれないことは極めて残念なことであり、かなり以前より英文誌の発刊が考えられていた。いろいろの理由でなかなか実現できなかったが、幸い本年度から年 4 回刊で英文誌 “Digestive Endoscopy” が発刊されることとなった。

さて一方、内視鏡学の進歩は目を見張るものがあり、新機種の開発とそれに伴う手技の進歩は fiberscope 出現以来、診断の領域から機能検査、更に治療内視鏡へと急激に流れている。また、こうした時流に鑑みて消化器内視鏡学会では拙劣な技術は医療過誤へと連ることも多いというこ

取り組んでいる。学会認定医の資格の取得には手技の習練や向上はもちろん、広範な知識、学会活動、論文の業績なども要求されることになる。

このような状況で、学会誌へは多岐にわたる内容の論文が投稿されるが、用いられる用語に関しては著者により新しく創作された語、それぞれ好みに応じた慣用語の使用など、まちまちの傾向があった。最近特に国際交流の増加に伴い、英語表記の統一用語の必要性が強く要求されてきている。かかる視点からも、学会誌編集委員会では早くから用語の統一を考慮し、1981 年に用語委員会を設置し、標準用語の画一化とその英訳の統一を図ってきた。ほぼ毎月委員会が開かれ、討論の結果、ここに消化器内視鏡用語集が誕生したのである。

さて本書は慣用語を統一し、基本的用語をまとめた単なる用語集というより、内視鏡学に関する基礎的知識をも記載した極めて親切的な編集方針のもとに作られている。初めに内

視鏡的解剖学的用語について記載し、次いで内視鏡所見に関する基本用語に関する総合的編集、各論では各臓器別の内視鏡所見とその病態の説明まで註釈されている。この註では更に内視鏡的疾患別分類まで述べられている。更に内視鏡手技に関する基本用語を機器の名称、診断手技、電子内視鏡、超音波内視鏡の領域にまで言及している。巻末には 10 頁にわたり典型的内視鏡カラー図譜まで掲載されていることは、用語編集委員の親切さが深くうかがわれる。極論すれば、本書は新しく内視鏡学を学ぶ医師から認定医まで、単なる語句の正誤のみでなく、疾患の定義、所見の読み方まで教えてくれる必携・必読の書とも言える。更に内視鏡技師にも益するところ大である。

このゆえに、各病院、殊に内視鏡施設を持つ病院はもちろん、消化器病学を専攻する医師には必要欠くべからざる用語集であり、特に論文作成に際し資料として常に座右にし語句の正確を期する貴重な用語集と言えよう。

最後に学会誌編集委員の 1 人として、本書の編集委員の先生方の絶大な努力に敬意と感謝の念を捧げるとともに、比較的安価に発刊した医学書院にも深謝したい。

A 5 判 176 頁 図 7 原色図 51
1989 定価 3,399 円 (税込) ㊦ 300

医学書院 刊